
可能性

Y.S.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
可能性

【Nコード】
N3942P

【作者名】
Y・S・

【あらすじ】
適当に緩く、でも濃く。気ままに打った短編をまとめています。

一日

重たい瞼を押し上げ、夜とは違った静寂に気付いて重たい身体を起こす。頭に掛かる重力の大きさにより布団へ落ち込みそうになるのを堪え、周囲へ注意を向けてみた。どうやら外では水が落ちているようだ、何やら騒ついている。

嗚呼、酷い雨だな。

そう、他人事の様に思いながら僕はパソコンを起動させた。……中々起動しない。容量が少なくなっているのか、将又起動を拒んでいるのか。恐らく、否、ほぼ確実に後者だろう。

相も変わらず眠れぬ日々が続いている。それによる精神的負荷が大きいのか、将又、幼少期から続く精神的病が悪化しているのか。何方が原因であるにせよ、日を追う毎に睡眠時間は削られていく。

然しそれに反するかのように、気分は好調とも言えよう気持を維持している。あらゆる物事に対してのやる気は無い、然し、手を付けさえすれば僕は何でもやっつてのける。そんな、傲慢とも自惚れとも取れる気持は、当人である僕からしても異常だと思う。

漸く起動し始めたパソコンと共にシャワーを浴びながら、次々と浮かぶ文字を打ち込んでいく。身近な物を使用し、且つ証拠が残らない様にする方法（詳細は割愛させて頂く）。嘘を貫く仮面の在り方、刑務所での生活、優越感、妄想、憐憫、妄想、妄想、全て妄想。何れも下らない、何の変哲も他愛もない戯言ばかり。

そして、ふと疑問と言う結論を打ち込む。何故狂っていると認識する事が異常なのか、狂っているのだから狂っていると認識する事の何がいけないのか。当たり前を当たり前と言う事が異常なら、根っからの嘔吐きである僕は正直者と言えそうだ。

嗚呼、下らない、下らない。

打ち込み途中の紙を捨て、バックアップされた記録も消却する。そして、再び白紙を用意して打ち込む。また捨てては用意する。僕

は毎日これを繰り返している、そうしなきゃ死も同然である。

シャワーの後、普段は摂らない朝食を軽く摂り、僕は傘を持って家を出た。普段、持たない傘を持って。

この雨降りなら昼前、早くて数時間で止むだろう。確信は無い、然し直感がそう訴えるから僕はその直感を信じてみた。止むと（確信は無いが）判っていて何故、傘を持ち出したのか。理由なんて無い、ただ気が向いたから持ち出しただけの事。

結果、やはり晴れた。嗚呼、傘と言う物は何て邪魔なんだ！捨ててしまおうか！

これは秋の晴れ間、否、夏に近付いた春の陽気のようだ。酷く元気なあいつは、駅の端で電車を待つ僕の黒い服に居たダニを殺し、その死骸は独特の臭いを放った。これはよく“太陽の匂い”と称される臭いである。光のみで匂いはしない。あ、電車が来た。

まだ僕が小さく物心付いた頃——臭いの原因を知らなかった頃——の幼い時、この臭いが嫌いだった。新品の電化製品と同じくらい嫌いだった。でも、これが所謂死臭であると知った時、少しだけその臭いが好きになった。然し、依然として嫌いな事には変わり無い。雨は止み、すっかり晴れてしまい殊更やる気を失った僕は帰る事にした。待ち侘びた電車を無視し、僕は反対側の電車に乗り込む。流石に学生は少ない……当たり前か、僕は所謂さぼりと言う行為を実行しているわけだから。

雨が降っている間は頭痛が酷いながらも、気温が低く涼しいので比較的過ごし易いから良い。然し、こうも晴れてしまつては、僕の体力が一桁を示すのもそう遅くはないだろう。灰になってしまふ。

帰路、普段は手製の小説を読んでいるところだが、今日は傘を持っているので小説が読めない。それも伴ってか、親しい友人から戴いた音楽再生機械が普段よりも活躍しているように感じた。

その機械は出掛けから今まで、ずっと同じ曲を繰り返している。僕が今聴いている局は、ネットでは洗脳曲として有名ならしい。一般に洗脳と言うと、特定の主義・思想を持つように仕向ける事やその

方法を指す。然しこの場合の洗脳は、一度聴いただけで耳に残り、思考回路の中で繰り返される音源を指すようだ。確かに、僕のパソコン上にはこの音が溢れ返っている。

嗚呼、乗換駅だ……前方を歩く学生を見ると、酷く邪魔なこの傘で殴り殺したくなる。どんな音を出すのか気になるから。珍しい音色を奏でるなら面白いし、陳腐な音だったらつまらない。きっと、この人はつまらない音が出る。だから、殺さない。それに至るまでの思考は至って単純明快ではあるが、他者曰く、僕の思考は理解し難いらしい。

音は見た目に少なからず比例すると言うのが持論である。小さく可愛い子は可愛い音色を奏でてくれたし、弱く老いた子は弱い音を出したから。前方を歩く学生は——言っては失礼だが内の音など聞こえないので言ってしまう——何処にでも居そうでありきたりな格好をしているし、特にこれと言った特徴も見当たらない。酷く陳腐な存在だ。

話を戻そう。僕はこの曲を聴いていると、より、自身が悦ぶように気分が良かった。防虫剤、消臭剤として知られる物質名が幾度となく繰り返されるこの曲は、曲調は勿論、歌手の音が非常に心地良い。音が良いからこそ、合唱となるとその悦びは殊更大きくなる。飽くまでも、個人的意見である。

おや、もうすぐ最寄駅のようだ。そろそろ曲を切り替えるか……と思ったがやめた。前方に見えた、座っている男性が僕を凝視していたから。不愉快に愉快だ……僕の何が珍しいと言うのだろうか、僕は人間の容姿をしているのに。

そういえば、ふと思い出す。蜥蜴や守宮を捕まえる理由を訊かれた時、黒焼きにして食べる為と答えて、七輪を用意しようかと答えてくれる友人は少ない。友人枠に囚われず、大抵の人は驚愕やら悪寒やら何やら負の感情を露にする。冗談に聞こえないのか、冗談ですら嫌なのか。何方にせよ、つまらない。でも、案外そういう子の方が面白い音を出したりして……若干気になる。

そして、僕は帰宅した。パソコンの充電がもう残り少ない、充電しなくては……。あれ、おやおや……。床に玩具が転がっている。どうやら箱から落ちたらしい。可愛い音の出る玩具……。ちゃんと片付けておこう、無くなっちゃうからね。

恋

私にも何時か素敵な恋人が出来る、何てそんな下らない事は今まで一度だって考えた事が無かった。私は平凡に日々を過ごすだけの凡人で、何か秀でた才能も無ければ特に得意な事も無い。何だって人並みにこなせるし、教えてもらえさえすれば私は何でも出来た。でも、それも人並み以上は出来ない。

誰かが、そう、例えばお隣の吉田さん。以前、私は吉田さんに碁を教えてもらった事がある。教えてもらったその日、私は吉田さんに勝ってしまった。別にそんなつもりは無かったが、それが酷く吉田さんの何かを壊してしまっただけ。それ以来、吉田さんは碁を打たなくなってしまった。

取り敢えず。その事が切っ掛けで、もしかしたら才能があるかもしれない、と思い碁会所へ行ったは良いがあっさりと常連に負けて帰ってきた。別にプロでも何でも無い、ただ碁が好きな常連に負けた。結局、その程度なのだ。

ある時は数学オリンピック、ある時は生け花大会、ある時はギターコンクール。色んなものに手出ししたけれど、私はその何れでも一番にはなれなかった。大体中間前後の成績しか取れず、私の名が日の目を見る事は無かった。

兎に角。私は誰かが教えてくれれば何でも人並みには出来る。でもそれまでで、それ以上には決してなれない。だから、誰も私に見向きしない。だからきつと一生一人身だ、と思っていたのだが。

授業をさぼって駅に行ったある日の事。上りホームで電車を待っている時、ふと向かいホームの人が目についた。特に変わった格好をしていたわけでも、特に変わった容姿をしていたわけでもない。ただ、何となく私にはその人が私を呼んでいるような気がした。その人はずっと携帯画面を眺めていて、私に気付いている様子は全く無かったけど、でもそんな気がした。

私は向かいのホームに移動して、その人に近付いた。でも電車が都合悪く来て、その人は電車に乗って行った。だから、同じように私も乗った。車内は下りのせいか人氣が少なく、空いた席が幾つもあった。私はその人の向かい席に座って、あたかも乗り合わせた只の乗客の振りをした。簡単、簡単、いつものように平凡な自分を演じていれば良いのだから。

幾つか駅を過ぎた時、その人が下車したから私も下車した。でも駅を出た時に、その人の姿を見失ってしまった。そして私は我に返った、何をしているのだろうと。幾ら平凡な日常に飽きたからといって、明日も学校をさぼるわけにはいかない。そう、戻らなきゃならない。私は家を目指して歩いた。

家に着いた、のに鍵が合わないから扉を開ける事が出来ない。仕方ないので管理人に開けてもらおう、と思ったら管理人が不在。今日はついていないみたいだ、だがこんな日は今まで無かったから妙に楽しい。結局、私は隣の空き部屋を寝泊まりに使用する事にした。明日、管理人に言えば良いかなと思って。

私が空き部屋で転寝している時、隣の部屋で物音がした。私の居る空き部屋は角部屋で、その隣は私の部屋……もしかして泥棒でも入った？心配だから見に行った。だけどリビングの明かりはついていなかったし、鍵が挟じ開けられた形跡も無かった。どうやら気のせいだったようだ、私は空き部屋に戻ってまた転寝をし始めた。そして、夜が明けた。

学校へ行くために、私は部屋を出て駅に向かった。そういえば家に荷物を置いてきてしまったから、今日は手ぶらだ。楽と言えば楽だが、一度家に戻らなきゃならない。……面倒だ。ま、こんな日も良いだろうと思って私はホームで電車を待っていた。酷い混雑だ……これだからラッシュは嫌だ。でもそんな事を言っている暇はない、電車に乗らなきゃ遅刻してしまう。

そんな事を思いつつ、ふと前を見るとあの人がいた。偶然にも同じ電車に乗ろうとしているらしい……誰かと一緒に。隣に居る人と

楽しそうに話している、その人は誰なのだろう。恋人だろうか、将又姉だろうか。まあ、私には関係の無いことだ。

私は人に押されながら電車に乗り、目的の駅で降りた。すると、偶然にもあの人が降りてきた。どうやら目的の駅は同じだったらしい。通学路を行くと、その人も同じ道を歩いている。同じ道を歩き、同じ学校へ入っていく。何で今まで気付かなかったのだろうか、あの人は私と同じ学校だったのか。

学校が終わって、帰る時も同じようにあの人は私の目の前を歩いて行った。それもそうか、同じ時間に終わって同じ時間に帰るのだから、同じように歩いていても不思議ではない。私の平凡な日常に、少し刺激を与えてくれそうだ。ほんの少し、期待してみた。

帰りの電車は昨日と違って混み合っていた。どうやら帰宅ラッシュに丁度ぶつかってしまったらしい……まあ、仕方ない。人混みを抜けて電車に乗れば良いだけの話。私は途中、誰かを押したり抜いたりしながら電車に乗った。それでもしなければ乗れなかったのだ、あの混み様じゃしょうがない。

家に帰って、テレビを付けると何やら速報が出ていた。どうやら、私を通う学校の最寄り駅で人身事故があったらしい。混雑が原因でホームから女性が線路に落下、丁度ホームへ入ってきた電車に轢かれて死んだそうだ。今さっきの出来事だな……怖い、怖い。もしかしたら自分がその被害者になっていたかもしれないし。

長身の男が突き飛ばしたのに誰も見てないなんて不思議な話だ。あーあんな事故話聞いたから気分が悪い、ジュースでも飲もう。確かに冷蔵庫にオレンジジュースがあったはず。……ん、おかしいな。冷蔵庫の中身が全然違う。私はお酒なんて飲まないし、ブドウジュースは嫌いだ。誰かこの部屋に入ったのか……？

あ、彼が帰ってきたみたい。

「お帰りなさい」

練乳バナナ

誰しも一度はやったことがあるはずだ。少なくとも、僕は毎日それを行いたいくらいなのだ。それ程この行為は魅力的であり、所謂中毒性を示す麻薬のような行いだと思う。とても気分が良い。

バナナの皮の内側にある白くて細い筋を綺麗に取り集め、其々が重ならないように広げて日干す。乾燥して脆くなったそれを粉末にして、空になった調味料容器へ詰めていく。保存料を入れていないから足は遅くないし、粉末にしてあるから湿気には十分に気を付けなきゃいけない。僕はこの粉末をバナ粉と呼んでいる。

この粉末には何とかって薬の成分とよく似た成分が含まれていて、自然乾燥させるとより濃くなるらしい。そして、それは体内で分解されずに蓄積される。それが所謂致死量ってやつに達すると、その人はあの世に逝っちゃうらしい。毎晩、標的の加湿器へバナ粉を加えているときに僕にとって一番楽しい時かもしれない。

バナ粉を加える時に、注意しなきゃいけない事がある。この粉はとても水に溶け易く、またその香りも仄かだが香る。生憎、標的は大のバナナ嫌いときた。僕が大好きなバナナを食べていると、何時も嫌な視線を向けてくる。嫌いなら見なきゃ良いのに。

標的と僕はとことん相性が悪いようだ。僕がデザートだけでなく、主食としてもバナナを口にするように、標的は苳だけじゃなくてパンや料理に練乳を使用する。単なる甘党と言うわけではなく、そう言うなればこれは練乳党ではなからうか。練乳党……練乳好きの集まる党、政治家にはなってほしくない党だな。

そんな訳で。僕が標的とする相手は大のバナナ嫌いで、その匂いだけにかなり敏感ときた。だから食べさせる事は不可能に近い、だが何も口からじゃなくたって良い。これは一度に摂取せずとも、何回かに分けて体内に入れば自然と蓄積される訳だし……だから僕は思い付いた。

標的は毎晩、枕元に小型の加湿器を置いて寝る。その加湿器は水道水を使用する簡易の物で、超音波により水を気化する優れ物だ。標的はその水に甘ったるい香りのアロマを入れて使用している。そのアロマは練乳の匂いに似ており、多く入れれば強い練乳の香りでバナナの匂いは消えるはずだ。これは利用する他無いだろう。

バナ粉とアロマを其々小さじ二杯程度入れ、水槽をよく振り動かして溶かしておく。これで準備はお終い。後は標的が帰宅し、それを使用するのを待つばかりだ。嗚呼、待ち遠しい……早く帰って来ないだろうか。

――……。――。

……嗚呼、どうやら僕は炬燵で寝てしまったらしい。喉が妙にいがらっぽい……炬燵で寝ると何時もこうだ、ベッドに行って寝直そう。炬燵から出ると、温度差により大きなくしゃみが一つ出た。こりゃ風邪を引くかもしれない……早くベッドへ、と思った時に標的は帰ってきた。運が良いやら悪いやら……。

炬燵の温かさに呼ばれた睡魔のお陰と言うべきか、せいと言うべきか。夕飯が億劫になっていたところへ標的が帰ってきたものだから夕飯を作らざるを得なくなった。標的は僕よりも家事全般がこなせると言うのに、花嫁ならぬ婿修行だと称してその殆どを僕に行わせる。ただ怠けたいだけではないか、全く。

冷蔵庫内にある僅かな材料でそれなりの夕食を作り、それらを互いに食し終えた頃。標的は何時ものように細い煙草を吸い始めた。標的曰く、その煙草は一般に市販されていない物だそうだ。然し非合法の、所謂大麻だとかではないらしい。火のつけられた煙草から僅かに香る甘さには、煙草嫌いの僕でも何故か心安らぐ様な気がする。飽くまでも、するだけだ。

その香りにまた睡魔がやってきた。今度は先程とは比べ物にならないくらい強敵だ。これは辛い……勝てそうにない、このまま僕

はやられてしまうのか？そう思った時、標的がその睡魔を倒すかのように強く僕の背を蹴ってきた。これには感謝したくとも出来ない、何せ背の痛み以上に睡魔への恋い焦がれるこの幼き僕のいたいけな心が――と、馬鹿な事を言っている場合ではなかった。

寝るならベッドへ行け、と急かされた。そりゃそうだ、また炬燵で寝たら今度こそ喉が可笑しくなるに決まっている。僕は標的の隣室に当たる自室へ入り、ふわふわの柔らかベッドに飛び込んだ。ふんわりとした毛布と清潔なシーツが僕の体を包み込み、穏やかな時へ僕を誘おうとしている。

重たい瞼を上げる力はもう残り少ない。あと少しで僕は旅立つ、そう、あと少し……。その時、僕の鼻腔に何とも甘ったるい香りが飛び込んできた。嗚呼、嫌な匂いだ。この臭いは確か……。そう、練乳だ。練乳に似た香り……。嗚呼、何で僕の部屋にこんな物が。

――と、そこで僕は気付いた。そういえば僕のベッドはシーツこそ清潔だが、布団は長く使われ綿がへたれていたはずだ。だからふわふわとは決して言い難く、寧ろぺたんこと言う表現がお似合いだろう。となると、今僕が寝ているこのベッドは僕ではなく、標的のベッドと言うことになる。あれ、そういえば僕、バナ粉を加湿器に入れた気が……。嗚呼、策士策に溺れるそは正にこの事だろうか。違っていたとしても構うまい。

嗚呼、バナナ好きな僕としてはこんな臭いになってしまったバナナに、哀れみと供養の言葉を口遊みたくなる。そんな事を思っている場合ではないのは分かっているが、嗚呼、大好きなバナナによって死すとは何て幸福なのだろうか。これは不服ながらもバナナの話を教えてくれた標的に感謝するべきだろう。有難う、標的。

「人のベッドで何してんの」

「もう僕は死ぬ、死ぬんだ。最後くらい一人にしてくれ」

「馬鹿な事言っていないで、さっさと自分のベッドに帰りな」

「嫌だー僕はバナナを愛しているんだ」

次の瞬間、僕はベッドから蹴落とされていた。

消えた息子

外ではまだしんしんと雪が降っている。滅多に降らない雪に——否、滅多に降らないからこそなのだが——年甲斐も無くはいだのがいけなかったのだ。

昼間、私は娘と雪だるまを作った。私は娘が指示する通りに雪で固め、マフラーや帽子をつけた。私より背の低い娘からしたら、この雪だるまはさぞ大きく見えたのだろう。「長持ちしそうね」と私に言う姿がとても愛らしい。

私は小さな頃に一度だけ、雪だるまを作った事がある。足を滑らせ、雪だるまの体となる部分へ身を投げ出した事が原因で数日間高熱に浮かされた。結局、回復した頃には製作途中の雪だるますらも全て溶けていた。それ以来、雪が降り積もった日は雪だるまを作る事が細やかな夢だった。とはいえ、中々夢の降らない地域だった為、そう容易い事では無かった。

大きな雪だるまに喜ぶ娘の笑顔が見られた上、夢まで叶った今日の私は言うまでもなく幸せだ。ただ、今は少し後悔している。雪だるまが完成した、その時にやめておけば良かったのだと、今思えばそう思う。でも愚かな事に、私は雪に夢中で娘に気を向ける暇も無かったのだ。

娘は雪に遊び疲れたのか、それとも私に呆れたのか、気付いた頃には家の中へ戻っていた。日が暮れかかっていた為私も戻ろうとしたのだが、ふと目についた柊の葉に気を奪われてしまった。柊の葉というのはギザギザしていてどう触っても痛い。然し、雪兎の耳に使うと中々可愛く見える物だ。

娘に雪兎を見せてやろう。そう思ったのがいけないとまでは思わないが、実行を翌日にすれば良かったと思う。完成するまでの数分間で、私はまた高熱を出したのだった。どうも私は雪に弱い、冬生まれなのに。

雪が降る日は必ずと言って良いほど体調を崩し寝込んでいた。でもそれは私が子供だからこそであり、大人になっても雪に弱いなどとは思ってもみなかったのだ。私が社会人になってから約六年間、雹や霰が振る事はあっても何故か雪は降らなかった。何かの陰謀だろうか。……下らないな、考えない事にしよう。頭が痛い。

「薬は飲みましたか、水分はしっかり摂って下さいね」

嗚呼、娘が私を気遣ってベッドの傍にきてくれた。……表情が何だか呆れている様だが、私の気のせいだろう。

「大丈夫さ、心配しなくても。明日には治っているだろうから」

「そう。じゃあ、早く寝なきゃね」

そうだね、と私は微笑み返したが……正直に言えば私は少し寂しかった。少なからず私は期待していた。娘が「本当に？何か欲しいものはない？」とでも言ってくれたら私はどんなに嬉しかった事か……。まあ、娘の性格からしてそれは言わないだろうがもしかしたらという事もある。愛らしい私の娘なのだから。

「それじゃ、お休み」

嗚呼、なんて私を悩ませる娘なんだ。娘は私の思いを知ってか知らずか、早々に寝室を出て行ってしまった。まあ、そんな素っ気ないところも好きなのだが……。小さな溜め息を吐き、不意に片手を枕の横へ置けば何やら熱を発する物体に当たった。何かと思いそれを見てみれば、先日子供用にと——決して安かったからではない——買い溜めた小さなカイロだった。娘の仕業だろうが、何時の間に置いたのだろうか。

暖房の効いた部屋で、薄い布団と厚い布団を肩まで掛けた私は氷枕が無ければ熱いくらいなのだが、娘なりの気遣いだ、そんな事はどうしても良く思えてしまう。嗚呼、暖かいねと言いなながら微笑む娘の顔が浮かぶようだ。娘の気遣いのお陰か、それとも薬が効いてきたのか、段々と眠くなってきた。眠る事にしよう。そうすれば明日には治っているだろうし、とても可愛くて愛らしい娘とまた遊べるのだから。

翌朝、私は娘にまた驚かされた。何時の間に布団へ潜り込んだのだろうか、私へすがる様に娘が横で眠っていたのだ。触れ合う手の温度が何とも心地好い。私が眠りに落ちる迄待っていたのだろうか。ベッドの中では三本の足が微かに触れ合っている。何だか落ち着かない、嗚呼、愛おしい。

娘がこんな近くに居て、然も同じ布団で眠っているなんて聞いたら世の父親はどんなに羨むだろうか。可愛い寝顔がこんな間近で見られる至福の時は、きっと私しか体験した事が無いだろう。

この時を満喫したいとは思うのだが、やはりこのままではいけないと思う。否何、別に後ろめたいわけではない。寧ろ羨まれる事だろうとは思うのだが、何か私を押さえつけるのだ。

取り敢えず私は、娘を起こさぬ様にそっと布団を出た。非常に名残惜しいが、仕方無いと思うしかないだろう。枕元に置かれた時計の針は五時半を示している。何時もなら娘が朝食の用意をしているはずなの時間だが……気持ち良さそうに眠っている娘を起こすわけにはいくまい。久々に私が朝食を作るのも良いだろう。そして娘を驚かせよう、どんな朝食なら良いだろうか。嗚呼、娘がどんなに喜んでくれるのか今から楽しみだ。

意気込んで台所へ来たは良いが……まあ何だ、あまり大した物は作れそうにない。冷蔵庫には牛乳と卵、長芋にめんつゆにレタス……それから昨日使い切れなかった肉の塊。まだ娘達が起きてくるには早い。ゆっくり考えるところか。

私は角の丸い八角形をしたマグカップへ牛乳と自家製のタバスコを入れ、電子レンジで数分温めた。甘い匂いが仄かに香り漂っている。淡く桃色に染まったその液体を口にすれば、娘にも飲ませてやりたかったと少し残念に思う。

ゆっくりと近くの椅子に腰を下ろし背を持たれば、静寂と安らぎとが私を包み込む。電気を付けていない上、まだ日が昇り切っていないため室内には明かりがない。この薄暗い室内は、とても落ち着く空間だ。この空間にいる時、私は幸せだなあと改めて実感する

のである。理由は色々あるのだが、それはまた別の機会にでも。

ホットミルクが私を芯から暖めてくれる。それだけで、もう朝食は作らなくて良いかな、という気持ちになってくる。

……いけないな、娘が空腹になってしまう。そうだ、朝食は卵焼きにしよう。あの肉を混ぜたらさぞ美味しい事だろう。よし、朝食はホットミルクと卵焼き、それからバタートーストに決まりだ。…
…ところで、卵焼きとはどうやって作っているのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3942p/>

可能性

2010年12月28日15時10分発行